2020.11.26

松沢哲郎のこと(4)

小嶋祥三

24 日に、京大の HP に松沢、友永の懲戒解雇の発表が出ていた。平田、森村は停職だった。とうとう、来るべきものが来た感じである。これから霊長研への沙汰もあるのだろう。

東京新聞などによると、松沢は自身のホームページに以下のコメントを発表したようだ。「不正の判定の基礎となる大学の調査そのものが事実を誤認しており、このため誤った事実認定に基づく不正の認定になっている。」松沢はこの処分に不服で、裁判で争うのかもしれない。最終的な決着は先なのかもしれないが、一つの区切りとして、感想を述べる。

わたしが彼について書いた最後の文章は、「松沢は今後、どのようにふるまうかで、評価されるだろう」で終わっている。これに対する答えが上の文章と考えることができる。彼は生涯を通して栄誉、称賛を求め続けてきたと思う。そして、その多くの栄誉で自らを着飾ってきた。したがって、これまでの生き方を全否定される今回の処分を、決して受け入れることができないし、認めることはないだろうと推測していた。松沢のコメントを読むと、わたしにとっては残念だったが、この推測は正しかったようだ。彼が若い頃、「三枚腰」と豪語していたことを思い出した。それにしても、彼は京大などを相手に何をしようというのだろうか。

また、彼のホームページには、研究資金はすべてチンパンジーのケージのために使用したので、無駄使いはやっていない、今後もチンパンジーが安寧に暮らせることを祈る、という意味の書き込みもあるようだ。

このコメントは、チンパンジーのためならば「すべてが許される」と言っているように読める。フィールズ賞、ノーベル賞の受賞者を擁する、京都大学の高等研究院の特別教授が、このような認識を持っているとしたら、情けなく思う。多くの栄誉で着飾った結果、彼は全能感を持ち、遵法精神を著しく欠如させたのだろう。特別教授への就任が、彼のこの傾向を助長させたのではないだろうか。その意味で、この人事は適切ではなかったかもしれない。コメントではチンパンジーには言及したものの、松沢の下で働き、一緒に処分された中堅・若手には一言も述べていない。残念に思う。彼は自分は正しいと思っているので、雑誌 Primates の編集長として、霊長類研究に関わり続けるようだ。ここまでくると、尋常でないとの印象すら持ってしまうのは、わたしだけだろうか。

わたしが霊長研 50 周年の記念論文集に寄せた文章『玄関前のクスノキ』の最後は次の文で終わっている。

「・・・ただ、このような道を歩み続ければ、若い研究者は伸び伸びと自分の興味を追求するのが難しくならないか心配だった。協議員会が形骸化し、人事も活気のないものになら

ないか心配だった。

さて、玄関前のクスノキはいつまでも元気な姿のままでいられるのだろうか?」

無論、あからさまには書かなかったが、松沢（だけではないだろうが）が行った研究所の制度改革に対する不安をクスノキに託して述べた。松沢がチンパンジーのために植えた樹が大きくなり、京大の自由な学風の象徴であるクスノキを圧迫していた。それを見て、霊長類研究所、霊長類研究の将来を不安に思ったのだ。「チンパンジーのじゃんけん」、そして今回の件（さらに、正高の件もある）で、この不安が現実のものとなったのは残念である。

さて、クスノキは、そして霊長類研究所はこれまでのようにやっていけるのだろうか。

松沢のホームページのコメントを読み、少し追加した（11 月 27 日）。